3 月 17 日のメッセージ

聖書：ヨハネによる福音書　12：20 – 36

「光のあるうちに、光を信じなさい」

終末時計を知っているでしょうか。1947 年、アメリカの「原子力科学者会報」に発表された、人類滅亡の時までをカウントダウンする時計で、真夜中 0 時までの時間で表されています。ちなみに、1947 年は 7 分前でした。以後、毎年発表されています。

1991 年、東西冷戦終結によって 17 分前まで巻き戻されたのですが、時計は少しずつ進み、ついに、昨年、ロシアのウクライナ侵攻によって 90 秒前となりました。

もちろん、この時計は危機を煽るためではなく、「まだ間に合う」と言っています。「今、踏みとどまれば、今、引き返せばまだ大丈夫だ」と。

イエスの十字架は、人間の目から見れば完全な敗北に映ります。だとすれば、レントはイエスの終末時計のように見えるかもしれません。光が失われていって、救いようのない暗闇が来る、と。

しかし神は、どのような苦難があろうとも必ず救うと約束してくださっています(「主は言われた／彼らはわたしの民、偽りのない子らである、と。そして主は彼らの救い主となられた。」イザヤ書 63:9)。

また、私たちはすでに、十字架の後に復活があることを知っています(「神は、わたしたちの一切の罪を赦し、規則によってわたしたちを訴えて不利に陥れていた証書を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。」コロサイの信徒への手紙 2:13-14)。

十字架は決して敗北ではなく、勝利であることを知っています。だから、心配することはない、大船に乗ったつもりでいれば良いではないか、と思うかもしれません。

確かに、イエスも「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」(ヨハネによる福音書 12:32)と約束されています。だから、「その時」が来れば、全てを主に委ねさえすれば良い。確かにその通りです。

けれども、注意したいのは、まだ「その時」は来ていないということです。蝋燭の明かりはまだ 2 本灯っています。まだ、真の暗闇は来ていないのです。

「光のあるうちに、光を信じなさい。」(ヨハネによる福音書 12:36)

将来の救いは約束逸れているのだから、安穏と今を過ごすという生き方も良いでしょう。それはそれで良さそうです。

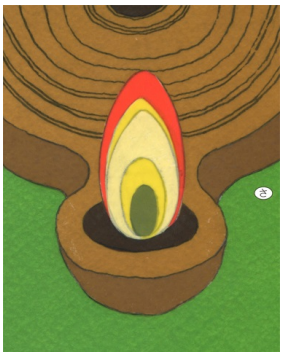
でも、だからこそ、今、あがくこともできるのではないか、とも思うのです。

「暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。」(ヨハネによる福音書 12:35)

少しでも暗闇が来るのを遅らせるためにできることがあるのではないか、と。

沖縄県名護市辺野古で、今日も海上行動を続けている人たちがいます。そのような彼らに対して、「結局、基地ができてしまうのならば、そのような行動には何の意味も無いのではないか」との声があります。結果だけが全てだと言わんばかりです。

でも、決して諦めないと、海上行動に参加しておられる方々は言われます。少しでも遅らせるために、今できることを精一杯やるのみだ、と。



声なき声を拾い上げてくださる神を信じて、あがき続けておられます(「主は貧しい人の苦しみを／決して侮らず、さげすまれません。御顔を隠すことなく／助けを求める叫びを聞いてくださいます。」詩編 22:25)。「まだ間に合う」と信じて、歩み続けておられるのです。

私たちも今、まだ光の中にいます。しかも、確実な救いの約束もあります。「まだ間に合う」はずと信じて、何から始めて参りましょうか。